

## 幕末明治の写真師列伝 第六十一回 内田九一 その二十六

松本順(良順)の墓は、現在神奈川県大磯の妙大寺というところにある。この妙大寺の左隣りの区域(妙大寺と御嶽神社の間)が、大磯の松本順(良順)邸(初めは別荘後、自宅)で、松本順(良順)は明治40年(1907)3月12日にここで亡くなった。最初は旧東海道沿いにある「嶋立庵」に松本が生前作った松本家の墓に埋葬されていたが、後に(昭和29年)親族が、近くの菩提寺日蓮宗妙大寺に改葬された。しかし、王子にあった内田九一の墓は、後に松本順がこの松本家の墓地を谷中霊園に改葬した際に無くなってしまい、その際に、内田九一の妻、おうたがその遺骨の入った骨壺と『内田九一墓誌銅板』と共に大阪へ持って行ってしまった。

内田九一の墓は、もう一つ、長崎の大光寺後山(大光寺上殿墓域)にもある。これは内田本家の墓域で、内田本家の墓の右端に「内田九一奥城」と記した石塔が建っている。この墓は『フォトタイムス』(昭和8年10月号)掲載の、松尾壽明「写真秘史古老達の話と諸方の記録(三)内田九一寫真記(四)」によれば、長崎の吉雄圭齋が、内田九一が亡くなったことを悼みこの墓域内に供養墓を建立したものである。

『東京日日新聞』の「数年来肺病に罹りて、吐血する既に四五度に及び、昨冬このかたは愈々肺病と成りたり。己れも兼て其早世すべきを悟り、門人中にて技術に工なるもの二人を選び、其業を嗣がしむるの策を定めれば、宮内省の御用を初めとし、一切の事ども九一氏の病中も更に差支なし。」という記事から推測すると、内田九一自身が長谷川吉次郎と古賀暁の二人を、自己の死を悟って選び、内田寫真館の後を託したようである。

長谷川吉次郎は、内田九一に写真術を学び、明治初年東京に開業した。明治9年(1876)、松崎晋二と共に明治天皇の御巡幸に供奉沿道を撮影、明治天皇のその後の御巡幸でも随行写真師として活躍した。明治11年(1878)頃、大型写真機を輸入、撮影を行って当時の人々の驚異を得た。「人の背丈に等しく写しとる」として話題をさらったという。また明治14年(1880)に開催された第二回内国勸業博覧会の美術品出品目録にも、「額(一)絹 倭姫尊穂食鶴ヲ見ル図 金泥引着色密画 下谷御徒町三丁目 長谷川吉次郎」としてその名が見られる。

古賀暁(こが さとる・あきら)は、明治17年(1884)12月3日付『読売新聞』の記事によると、内田九一の名跡を継承して独立し、麴町平河町三丁目五番地で開業している。しかしその写真館も次第に不振になったという。明治24年(1891)頃に撮影された麴町の住所が記された写真があることから、明治24年(1891)頃までは開業していたようである。内田九一門人、飯岡仙之助(深香)は、明治初年浅草瓦町に業を開いた後、明治15年(1882)秋に独立して、上野元黒門町五で写真館を開業していた吉川雅武の後を譲り受けてこの写真館を継承した。

他に主な内田九一の弟子としては、初代・市田左右太(石城、神戸)、葛城思風(大阪)、森川新七(神戸)、田村景美(大阪心齋橋)、大木宗保(東京深川)、大井ト新、薛信二郎(長崎新町)、内田清介、新井八郎、山際長太郎(心齋橋東)、内田九一

の従弟内田曾之助(大阪天満)、田井晨善(青森県弘前)などの名が上げられる。

内田九一が亡くなった直後の明治8年(1875)の逸話としては、函館の写真師、田本研造が撮影した、設置直後の碧血碑の原板(ネガ)を、田本がこの碑の建設委員へ渡したところ、この碧血碑の原板は内田九一の手に渡ってしまった。後の明治14年(1881)に、東京で碧血碑の原板が売りに出されていることを知った田本はこれを買戻している。

『東京日日新聞』明治8年(1875)2月18日発行の記事には、「数年来肺病に罹りて、吐血すること既に四五度に及び、昨冬このかたは愈々肺病と成りたり。己も兼て其早世すべきを悟り、門人中にて技術に工なるもの二人を選び、其業を嗣がしむるの策を定めれば、宮内省の御用を初めとし、一切の事ども九一氏の病中も更に差支なし。」とあり、その後、浅草大代地の写真館は内田九一夫人の「おうた」が館主となり、この写真技術の巧みな長谷川吉次郎と古賀暁などの弟子たちが写真技師として手伝っていた。

しかしながら、この「おうた」は、後に蛸殻町の米商人島田慶助という男といっしょになり、内田九一の大阪時代の門人であった山際長太郎を伴って、大阪順慶町に移転した。順慶町は以前、大阪時代の内田九一が開業していた町である。

そして、「おうた」は順慶町心齋橋東(順慶町三丁目)に写場を設け、写真材料商も兼業していたが、約10年後、明治22年(1889)頃にはすっかりこの「内田寫真館」の名跡も絶えてしまい、その後その消息も聞かれなくなったという。

しかしながら、明治24年(1890)の写真で写真台紙裏側に「東京横浜内田九一製」、写真台紙表側下部に「大坂順慶町三丁目 東京内田支店」と判のあるものがあることから、その詳細は不明だが、順慶町三丁目の「おうた」の内田写真館は、明治24年(1890)までは営業していたのではないかと考えられる。

明治14年(1880)9月30日、当時有名な写真師だった北庭筑波が内田九一の浅草大代地の写真館を購入して、「旧内田舎」として翌10月1日より再開業した。北庭筑波は「九一の名跡が絶えるのを惜しんで再興した」のだという。

北庭筑波は内田九一と生前から交流があり、写真材料商、浅沼商会創設の浅沼藤吉はこの北庭筑波からその頃都下第一流の写真師だった、内田九一、清水東谷、横山松三郎を紹介してもらったという。しかしながら、この北庭筑波の「旧内田舎」は、明治18年(1884)に廃業となる。

明治7年(1883)4月に刊行された服部誠一著の『東京開花新繁昌記』には、「写真が都下で行われるようになってから十年と出ないのに、錦絵に匹敵するほどもてはやされ、内田九一をはじめ数十名の写真師が繁栄をきわめている。料金は一定しないが、ガラス撮りは二十五銭、紙に写せば五十銭乃至七十五銭。ところが同業間の競争が激しくなって、ある写真館では、当分の写料金一朱、紙写二朱と書き出したところもあった云々」と原文は漢文で記載されている。

(森重和雄)